

私の価値観—命をつなぐための指針

(原文は英語)

ガマリエル・ジョーダン・B・ラングイド (22 歳)

フィリピン・セブ州

セブ・ノーマル大学

まだ私が子どもだった頃、私の祖父がある質問をしてきた。「もし鳥の巣を見つけたらどうする？」この質問に幼い私の心はうきうきした。なぜなら、ずっと前から巣を取ってその中にいる鳥と卵をカゴに入れて飼い、近所の人たちに自慢したいと思っていたからだ。子どもにとって鳥の巣は、何日も何日も森の中をくまなく歩き回ってなんとか手に入れられる狩りの戦利品だった。そのため、私はすぐにこう答えた。「夕暮れ時に巣を見張って、鳥が戻ってきたら手で捕まえる。」と答えた。すでに炎が消えそうな口ウソクのような祖父は、知らぬ間に衰えて死んでいく人たちを見てきたので、まるでこんな残酷な話は聞いたことがないとでもいうように、私の答えに顔をしかめた。そして、全ての生き物、つまりは地球全体に対して、優しく、情け深く接し、育てる心を持つべきだと私に説いた。その瞬間に私の人生は一気に変わった。もう鳥の巣を手に入れることを切望する少年ではなくなった。私の祖父は、命を大切にし、それを維持する方法を私に教えてくれた。

大人になった今、あの祖父の質問は自分の中でまだ鮮やかに生き続け、私の胸の中で翼を生やして、勢いよく羽ばたいている。何か困ったことがあると、決断をする前にいつも祖父の質問を思い出す。「もし鳥の巣を見つけたらどうする？」あの時の自分の答えは恥ずかしいが、祖父が私に教えてくれた価値観は、とても啓発的で、私はそれを使って地球をもっと生きやすい星に、つまりは全ての生き物が栄え、邪魔されることなく有意義な一生を送ることができる、住みやすい社会にしようとしている。

私は、ちょっとした親切な行為は、偏見や人種差別などを正し、時には事故を防ぐことができる癒しの要素だと信じている。ある夜、町から車で帰宅していた時のことをまだ覚えている。ライトがついていない自転車に乗っている若者がいた。不規則な街灯の明かりだけを頼りに自転車を走らせている彼にとって、その道路はいつ車にひかれるか分からない、とても危険なものだった。ちょっとした親切心から、私は車の速度を落として彼の後ろにつき、彼が家に着くまで車のヘッドライトで道を照らしてあげた。またある時は、子どもたちに石を投げつけられ、追いかけてられている野良猫に遭遇したことがあった。いたずらっ子たちが私の目の前を通り過ぎる時、私は喜んで不運な猫が逃げて行った方向を教えてあげた。そして、彼らが去った後、鞆の中からそのかわいそうな生き物を取り出し家まで連れて帰った。名前を名乗らずに行う人助けは、また違った輝きをもたらす。人々が親切と思ひ

やりに価値を置きさえすれば、良いことしか起きないだろう。

ウクライナやアフガニスタン、シリア、パキスタンなどの戦争中の国々が必要としているのは、小さな優しい行為だ。減少し続けている熱帯雨林を再び豊かにするために必要なのは思いやりだ。私たち人間は、無情な生き物である以上にもっと良いものになれるはずだ。命を大切に、国連が定めた持続可能な開発目標に切迫感を持って取り組めば、地球はまた息を吹き返すことができる。私たちにはもうあまり時間がない。私たちが行動を起こさなければ、全ての生命は滅び、それは私たちの自滅を意味する。人は欲望を達成するために無情になる必要はない。そして、全ての欲望が残酷さから生まれるわけではない。私たちは、いつでも無私無欲な平和を愛する人になることを選ぶことができる。相互につながる強い世界を構築するためには、世界市民として優しく思いやりのある人間にならなくてはならない。

私はごく普通の人間であり、世界をより良くしようと作文を書いている他の若者と同じように、世界に向けてこの作文を書いている。どうか私たちの声に耳を傾け、私たちの価値観を尊重してほしい。私たちは、それぞれ別の場所に散っていくためだけに集められたわけではない。分断された世界を再び一つにするためにここにいるのだ。困った状況に追い込まれた時は、祖父が私に教えてくれた巣の扱い方を思い出してほしい。そうすれば必ず命をつなぐことができるだろう。